雑木林のみちの

樹木

雑木林は本来、農家によって薪や炭の用材や農用（キノコ栽培や堆肥づくり）の林として台地部につくられた成長の早い高木のクヌギ、コナラなどと低木のエゴノキ、ヤマグワなどの落葉広葉樹からなる。落葉している時は、林地内に太陽光が射し込むので、林床の植生や生き物の活動が活発である。人々の生活と適応した植生と生態系が成立しており、1960年頃までは東京近郊の一般的な景観として残っていた。現在では公園や崖線の一部に残っているにすぎず、自然とふれあえる貴重な場所になっている。また、この地域では日当りのよいところでクロマツ、アカマツが生育していて雑木林の一部となっている。かつては建築材や燃料、松ヤニなどに利用されていた。

1. 宝来公園

宝来公園は、住宅街の真ん中にあり古くから公園として管理されているので、元々の雑木林は高さ20mを超える大木群になっている。斜面下にある池には多くのキショウブが繁茂し、トンボ、チョウのほか、カワセミやカモなどの野鳥がみられる。雑木林にはコナラ、クヌギの大木やクロマツ、アカマツの高木、ムラサキシキブ、ヒサカキ、ヤブツバキなどの中低木。地表にはササ類やシダ類が目立つ。広場、歩道脇などには、ケヤキ、クスノキ、スダジイやウメ、キンモクセイ、イロハモミジ、サツキ、オオムラサキ、アジサイなどが植えられている。

キショウブ（アヤメ科）
観賞用として明治時代に輸入された多年草。初夏に黄色のほか、品種改良された白色、八重咲きなどの大きな花が咲く。

2. 多摩川台公園

多摩川台公園は、多摩川が田園調布台地を削った崖線とその上の台地につくられた公園で、多摩川を見おろす景観がすばらしい。台地面には、4～5世紀に造られた亀甲山古墳、宝莱山古墳のほか、多くの古墳がある。古墳や崖線は雑木林や常緑樹林になっており、様々な樹木が茂っている。グランドや広場には古くからサクラ、クスノキ、ハナミズキ、ムラサキシキブ、イロハモミジ、アジサイ、サツキ、オオムラサキなど様々な植栽が行われ、旧浄水場の沈砂池が水生植物園として活用されている。

雑木林は、コナラ、クヌギ、アカマツ、クロマツ、ムラサキシキブ、ヤマグワ、エゴノキなど。常緑樹林は、スダジイ、シラカシ、アカガシ、ネズミモチ、ヤブツバキ、ヒサカキ、アオキ、シュロなどが茂っている。花の季節には多くの来園者で賑わっている。

アジサイ（アジサイ科・落葉低木）
花びらにみえるものががくで、土壌の酸性度によって花の色が青（酸性）やピンク（アルカリ性）に変わる。多くの園芸品種がある。

アカマツ（マツ科・常緑高木）
樹皮は赤褐色。山地の乾いたやせ地に生える。松かさ（実）は、翌年秋に熟す。

クロマツ（マツ科・常緑高木）
樹皮は灰黒色。海沿いに多く生える。松かさ（実）は、翌年秋に熟す。

エノキ（ニレ科・落葉高木）
樹皮は灰黒褐色で、枝ぶりは曲がりくねっている。建築、家具、道具の用材や薪炭材として利用される。

メタセコイア
（ヒノキ科・落葉高木）
当初「化石」として国内で発見されたが、中国に現存することが確認され「生きた化石」と呼ばれるようになる。秋に赤茶色に紅葉する。公園や街路樹として植えられる。

3. 田園調布せせらぎ公園

田園調布せせらぎ公園は、昭和初期に遊園地として開園し、昭和後期にはテニスクラブになった。その後、区立公園になってからは、平地部はグラウンドや草地になり、斜面部は従来の雑木林や常緑樹林が残されている。公園内には3つの湧水地があり、「田園調布せせらぎ公園」の名称の由来となっており、六郷用水の水源になっている。グラウンド、広場、歩道は良く整備されていて、ボール遊びや休息に利用されている。田んぼや山野草エリアを地域の方々が管理し、自然豊かな公園になっている。

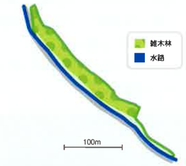
スダジイ
（ブナ科・常緑高木）
樹皮は黒褐色で縦に深くさける。しずく型のどんぐりが翌年秋に熟す。昔は薪炭材として使われていた。

エゴノキ（エゴノキ科・落葉小高木）
樹皮は暗茶褐色。雑木林に生える。果皮はエゴサポニンを含み有毒。かつては石けんの代用となる。

クロガネモチ（モチノキ科・常緑高木）
樹皮は灰白色で平滑。樹皮から"とりもち"がとれる。枝先にたくさん赤い実をつけ美しい。

4. 六郷用水

中原街道の丸子橋から約350mの旧中原街道まで六郷用水崖線が続く。現在の六郷用水は、田園調布せせらぎ公園の湧水を主な水源とする人工水路で、並行する道路との間に桜並木の遊歩道がつくられている。常緑樹のほかにケヤキ、コナラなどの落葉樹が生育している。水路にはセキショウやホウライシダがみられ、清流と緑に覆われた静かな散策路として多くの人々が利用している。



ヤブツバキ
（ツバキ科・常緑高木）
樹皮は灰白色で平滑。冬から春先に赤い花が咲く。ツバキの基本種で、多くの園芸種がある。

シロダモ
（クスノキ科・常緑中高木）
樹皮は緑色を帯びた暗褐色で平滑。種子はロウソクの原料。淡黄色の小さな花と赤く熟した実を同時にみられる。

雑木林のみちの

昆虫

「雑木林のみち」には、落葉樹や常緑樹の林に加えて、池や水路などの水辺がある。多くの花の咲く公園にはキチョウやモンシロチョウ、明るい林にはアオスジアゲハやナミアゲハが集まり、茂みの中では樹液に集まるタテハチョウの仲間がみられる。夏にはアブラゼミやミンミンゼミ、ツクツクボウシ、クマゼミが鳴いている。秋にはめっきり昆虫は減ってしまうが、ツヅレサセコオロギやカネタタキの音色が楽しめる。春から秋にかけて多くのトンボが水辺でみられるのも「雑木林のみち」ならではの特徴でもある。

7～10月

ミンミンゼミ（セミ科）
翅は透き通っている。「ミーン、ミンミンミン…」と抑揚のある鳴き声。

7～10月

アブラゼミ（セミ科）
翅全部が茶褐色で透き通らない。「ジリジリジリ…」と単調な鳴き声。

4～10月

アオスジアゲハ（アゲハチョウ科）
黒い翅に水色の模様が目立つ。花や地面で吸水。高い木の梢を飛ぶ。

4～10月

ヒカゲチョウ（タテハチョウ科）
薄茶色の地味なチョウ。翅の裏面に目玉模様がある。人の気配に敏感で、すぐに林の中に逃げ込むことが多い。樹液にも集まる。

5～9月

コシアキトンボ
（トンボ科）
オスは腹部に白いテープを巻いたような模様。メスは黄色。オスはなわばりをもち、他のトンボを追い払う。都心の公園でよくみられる。

4～8月

クロスジギンヤンマ
（ヤンマ科）
胸部に黒い筋が2本ある。オスの腹部には鮮やかな瑠璃色部分がある。ギンヤンマと違い、水が生い茂るような暗い池を好む。

4～10月

シオカラトンボ
（トンボ科）
オスは胸や腹背面が白粉で覆われる。メスはやや緑色味があり「ムギワラトンボ」となる。

4～10月

アオオサムシ
（オサムシ科）
背面は金属光沢のある緑色、赤銅色、黄褐色など地域によって異なる。

3～10月

ナナホシテントウ
（テントウムシ科）
頭と胸は黒。翅は赤色で7つの黒色点がある。成虫、幼虫ともにアブラムシ類を食べる。

雑木林のみちの

爬虫類

雑木林の木漏れ日でカナヘビが日向ぼっこをし、薄暗い木肌の色に紛れるようにヤモリがいます。運が良ければ（？）ヘビにであうこともあるでしょう。高木、中低木、下草の豊かな雑木林は、生き物たちにとっても大切な場所です。

一方、水辺は魚や両生類はもちろん、カメたちの生活場所です。日本に昔からいるクサガメも今や侵略的外来種に指定されているミシシッピアカミミガメ（ミドリガメ）にその生活場所を奪われつつあります。

ニホンヤモリ（ヤモリ科）
体色は灰色や褐色に斑紋がある。環境に応じて瞳孔を変化させることができる。尾は切れると再生する。夜行性で、昆虫やクモ、ワラジムシなどを食べている。

クサガメ（イシガメ科）
頭部は暗褐色や褐色、黒色で、黄色や薄黄緑色の不規則な斑紋がある。昼行性で日光浴を好む。雑食性で主に水中で採食する。

ミシシッピアカミミガメ（ヌマガメ科）
アメリカ合衆国南部からメキシコ東部に分布。1950年代に輸入が始まり、60年代には野生でみつかる。昼行性で日光浴を好む。雑食性だが、他のカメ類の卵を食べる習性がある。

ウシガエルとアメリカザリガニ

多摩川台公園の水生植物園には、ウシガエルとアメリカザリガニという2種類の外来種が生息している。ウシガエルは食用とされることもあり食用ガエルという別名をもつ。日本には1918年アメリカから十数匹が導入され、その後、輸出用に生産されたといわれている。このウシガエルの餌用として1927年に20匹輸入されたのがアメリカザリガニである。どちらもその後、養殖池から逃げ出した個体が全国に生息するようになった。現在、どちらも日本ではほとんど食用にはされていない。

ウシガエル　アメリカザリガニ